

要 旨

『源氏物語』 「とみに」 考

松井 佳子

『源氏物語』の宇治十帖にいたるまでの「とみに」について論じた。「とみに」は、打消しの語を伴うことで、すぐには何も行わずに物語の中に「間」を生み出す。その「間」が意図的に生み出され、扱われていたのではないか、という視点から「とみに」について考えた。

『源氏物語』における「とみに」の用例は五十七例である。そのうち、宇治十帖までの光源氏・夕霧に関連して、恋愛の場面で用いられている用例から検討を進めた。

光源氏が「間」に感情を込めることを巧みに行き、さら周囲の女性たちは、巧みに「間」を用い、自身を演出していることが分かった。女性たちとは、葵の上、末摘花、明石の君、紫の上である。特に、光源氏・紫の上・女三の宮の三角関係においては、紫の上が「間」を支配しているともいえる。

対する夕霧は、「間」を演出することに長けているとは言い難かった。しかし、落葉の宮と共にある場合に限っては、夕霧も「間」を上手く演出することが出来ていた。また、北の方である雲居雁は、夕霧に対して「間」を演出するものの、自身のための効果は得られず、夕霧の落葉の宮への思いをさらに掻き立てるような結末となってしまった。それ故、雲居雁もまた、「間」を巧みに演出し、用いているとは言い難かった。

次に論じたのは、前章までの恋愛に関わる用例ではなく、悲しみに関する用例である、それらの用例を、悲しみを演出する「間」として考えた。演者たちは、桐壺の更衣の母と鞍負の命婦、光源氏と藤壺、柏木と落葉の御息所、夕霧と御息所である。それぞれの用例で、「間」を用いて悲しみを演出していたが、特筆すべきは、どちらか一方が「間」を生み出すのではなく、双方によって悲しみを共有し、演出している点である。そのことから、悲しみに起因する「間」は一人で持つものではなく、他者と共有し、寄り添い合うものとして『源氏物語』において描かれているように思われ

た。

また、垣間見に関する「間」についても論じた。用例は野分巻と若菜上巻の二例である。野分巻では、夕霧が紫の上を垣間見たことが光源氏に露見するが、夕霧の特性上、ここでの「間」による垣間見の露見は、物語上の演出であろうと考えられた。次に若菜上巻における「間」は、柏木と夕霧に女三宮を垣間見する機会を与えたが、影響を受けたのは柏木だけであった。そのことから、若菜下巻における柏木と光源氏との間に生まれた「間」について考えた結果、柏木に垣間見する機会を与えた「間」から光源氏の前で思いのままに生み出した「間」は、一連の必然的な「間」であるとした。

最後に触れたのは「とみに」に関連して「とみの」に関する用例である。『源氏物語』において「とみの」の用例は僅かに三例であった。夕顔巻では「とみのこと」という形で登場するが、「とみのこと」の散文における初出は『伊勢物語』八十四段である。そのことから、『源氏物語』における「とみのこと」並びに「とみの御文」も、『伊勢物語』を想起させる手法を用いているのではないかと考えたが、検討の結果、明らかな共通点は見つからなかった。しかし、少なからず結びつく点もあり、何よりも、『源氏物語』以前に「とみのこと」が用いられている用例が「伊勢物語」のみであることから、『伊勢物語』とも関連は全くないとは言えないのではないか、という結論に至った。

以上、幾つかの観点から「とみに」「とみの」を論じ、特に「とみに」に関して多くを考えてきた。結果として、「とみに」が打消しの語を伴うことで作り出す「間」は意図的に用いられ、物語を動かす役目を果たしているという結論に至った。方法としての「間」という役割は確かに存在したのだ。